

各地で話題の病害虫

モトジロアザミウマ(仮称)

学名: *Echinothrips americanus* Morgan

2002年4月、愛知県豊橋市で栽培中のシソの下位葉がかすり状になり落葉する等の症状がみられ、その葉裏に多数のアザミウマが確認された。横浜植物防疫所による同定の結果、本種は、1999年東京都小笠原村父島のインゲンで初めて発見された *Echinothrips americanus* であることが判明した。

本種は、北アメリカ原産で、現在ではカナダ南部からフロリダ州を中心に北米大陸で広く分布し、また、最近ヨーロッパ各地でも発生が確認されている。



愛知県病害虫防除所 伊藤啓司氏提供

寄主植物は、ポインセチアやインパチエンス等の観葉植物を始め、キュウリやトウガラシなど100種類以上の植物が報告され、温室害虫として重要視されている。

成虫の体色は一般に暗褐色、体長は雄1.3mm、雌1.6mmで、頭部、前胸背板及び後胸背板は網目状でその内側にしわ模様を持ち、前翅の基部、中部及び先端は灰白色である。また、触角は8節で第1節と第2節は暗褐色である。幼虫は黄白色でやや細長く複眼が赤く、体全体が刺毛に覆われている。

本種は、寄主植物の中位葉から下位葉の葉裏の葉脈沿いに寄生し、食害を受けた葉は艶がなく褐変し、手で触れると簡単に落葉する。

発生ほ場では、寄生葉の除去や侵入防止のための寒冷紗等の設置による発生の拡大防止措置が有効と考えられている。また、現在本種に対する登録農薬はなく、愛知県農業試験場では薬剤感受性試験を実施中である。

キク緑化病(仮称)

病原体: ファイトプラズマ

1999年4月、沖縄県のキク栽培ほ場で花器が緑化し、正常に開花しない奇形花株が認められた。症状がファイトプラズマに起因する病害に類似していたことから、独立行政法人農業技術研究機構中央農業総合研究センターに同定依頼したところ、本病原はファイトプラズマで、1960年代沖縄県で発生が確認されたマメ類てんぐ巣病の病原と同一であることが判明した。キクで発生が確認されたのは、我が国では初めて



沖縄県病害虫防除所 上原勝江氏提供

である。

本病原に侵されると、花器は緑のまま開花せず(花器緑化)、やがて花を突き抜けて新たな芽を生じ(突き抜け症状)、葉は小型化し、叢生状態となる。また、感染時期が早いと、花は緑のまま肥大せず開花しない場合もある。

寄主範囲は広く、ダイズやエンドウ等の豆類を始め、ジャガイモ、トマト、カボチャ等にも寄生することが報告されている。また、アキノノゲシ、オオアレチノギク、ヨモギ等の雑草でも、PCR検定により、寄生が確認されている。

また、本病発生ほ場及びその周辺では、本病原体を媒介するミナミマダラヨコバイが発見されている。

本病の防除対策としては、伝染源となる病株の早期抜き取り、媒介虫であるヨコバイ類の防除、周辺雑草の除去等が考えられる。